

---

# ホームズノート

Chiro

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホームズノート

### 【Nコード】

N0601D

### 【作者名】

Chiro

### 【あらすじ】

ホームズを心の師とし、後輩の光伸をワトソンと呼ぶ、高校国語教師の富永あつし28歳。彼の宝物はホームズの解決したトリックを、全て書いた通称「ホームズノート」。そのノートを持って、今日も難事件に挑みに行くが………？

## プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。  
実際の人物名や団体名とは関係ありません。

## ブローグ

今日付けの新聞記事。

大きな見出しに書かれた文字は、

「平成ホームズ誕生！」

僕が読んでる記事は

「打った！サヨナラホームラン！！」

僕の朝は実に優雅である。

目覚ましが鳴ると同時に目が覚め、

ベッドから起き上がると、玄関へ向かい新聞を取る。

取ってきた新聞を、リビングにあるオープンキッチンのカウンターに置いて、パンを焼く。

パンを焼いている間に、卵を右の手で二つずつ割り、ボールに入れてとく。

といた卵を、あらかじめ油をひいて温めておいたフライパンに流し込み、

スクランブルエッグを作る。

パンが焼け、スクランブルエッグが出来たら、

オープンキッチンの前にあるテーブルに並べて、コーヒーを作る。

今日は肌寒いので、ホットコーヒーだ。

こうして、僕の朝食が始まるわけで……

僕は新聞を読みながら朝食を摂るのが日課でね。  
今日は、たまたま開いたスポーツ面を読んでいる。  
いつもなら、政治面を見ているのだが…。  
少しばかり気になる記事を見つけたからね。  
まあ、それについては今度話すでしょう。

僕は基本的にはテレビより新聞派で、テレビはあるが、あまり見ないのだよ。  
よって、最近のアイドルやら俳優やらはよく分からないわけで、要するに、世間の波から激しく外れているのだ。  
友人のワトソン君（本名は光伸君だが）には、そういった面でよく世話になるわけで。

そういえば、話は変わるが、ワトソン君はなんでも知っているのだよ。

特に、最近人気の出てきたアイドルグループや、歌手や役者、最近始まったドラマなんかは、当たり前のように知っているな。  
そういうところは、僕にとって唯一の尊敬できる部分なのだ。  
だが、僕がワトソン君にそういうと、彼は決まってこういうのだ。

「ちょっと先輩……それ褒めてませんよ」

僕にしてみたら、とても立派だがな。

なんとも不思議なヤツだよ。

しかし、これでも僕の唯一の友人でね。

こんな変人の相手を出来るのは、彼しかいないのだよ。  
ちなみに僕の年齢を教えると、28歳でね。  
ま、だからなんだっていうんだろうね。

あ、大事な事を忘れていた。

僕がなぜ、こんな公共の場に出てきたのかというのだね、

(実は目立つのはあまり好きじゃなくてね)

今日、僕が通う学校で(あ、教師なんだよ)、なにかが起こるらしいんだ。

さあ、なにが起こるのかは、僕にもワトソン君にもわからなくてね。だから困っているんだよ。

だがしかし、僕にはこの頭脳があるからね。

なにが起こっても大丈夫さ。これまでもちゃんと解決してきたからね。

ああ！忘れていた。僕の大事なノートのことを。

僕が読んだ、ホームズ全集に出てくる全てのトリックを書いたノートのことさ。

これは僕の宝物だね。あまりに難問が出てくるとこれに頼ってしまうのさ。

まあ、ホームズは僕の心の師だからね。

ああ、こうして説明ばかりじゃつまらないだろう。

すまないね。じゃあ、これから起きる事件を、

君たちと共に解いていこうではないか。

なあ、ワトソン君。そこにいるんだろう？

「……………僕は光伸ですよ。」

まあ、いいじゃないか。

さ、本編だよ、ワトソン君。

君の物知りぶりを世間にさらすことができるではないか。

「…褒めてるわりに文章おかしく不是吗？」

…君は結構ねちっこい男だな。ワトソン君はそんなヤツじゃなかったぞ。

ま、僕のいうワトソン君はホームズのワトソンだがね。

「まったく…何処までも自由な人だ……」

## 第一ページ

キンコーン カンコーン…

8時30分の本鈴が校内に響き渡るころ、3年7組の教室のドアは遅刻ギリギリで走ってくる生徒でこった返していた。

生徒たちは我先にと言わんばかりに、バタバタと音を立てて教室に入り込む。

そんな生徒たちに入り混じり、明らかに20は超えた一人の男が透明の箱を抱えて入り込んできた。

キンコーン カンコーン……プツン…

「あー！あつくん遅刻〜っ！〜！」

「あつくん」と呼ばれたその男は、教室に入り教卓の前に立つと持っていた箱を教卓に置いた。

「君たち…仮にも僕は君たちの担任をやっているんだが？せめて『先生』をつけなさい、『先生』をつ！」

「えー…でもその身長じゃーね…」

男の一言に生徒たちは動じもせず、好き勝手に騒ぎ始めた。

男の名前は、富永あつし。年齢28歳、国語教師。

28歳という年齢にしてはやや小さな身長のせい、

生徒からは「あつくん」と呼ばれ、同僚の教師からは「変人」と言われ、



校内では（ある意味）名の通った男である。

「…ン？…なんだ、金沢は休みなのか？」

教卓に置いた透明の箱から、出席簿を取り出して出席確認をしていると、

金沢馨の席が空いていることに気が付き、誰に問うでもなくつぶやいた。

「さあ？知らねー」

教卓の前に座っていた一人の生徒が、富永の独り言に気付き、そう答えた。

「ふーん、宮城も知らないのか…ま、いいか。高校3年にもなれば電話なんてしなくても大丈夫だろう」

富永は小さくそうつぶやくと、持っていた出席簿で教卓をバシンツと叩いた。

「ほら！席着いて！！授業始めるぞ！」

本日一発目の授業を始めようとしたとき、教室のドアを叩く音がした。

富永がドアを開けると、そこには数学教師『土井光伸』が立っていた。

「…先輩、ちょっと。」

どうも深刻そうな顔つきの土井を、富永はドアの外で待たせ、

生徒たちに、静かにしてろよ、と忠告して教室を出た。  
教室を出ると、突然土井が富永の腕を引っぱって走り出した。

「なに?! 何処に行くんだ!!?」

「第一応接室です!! 説明は後でしますから!!」

土井の足の速さについて行けなくなった富永は、  
半ば引きずられる格好で第一応接室へと急いだ。

- - - - -

コンコンッ  
…

僕らは応接室のドアを叩いた。

中からの返事を聞き、息を整えて静かにドアを開く。

中には学校長と教頭、3年の学年主任そしてもう一人、  
顔をハンカチで押さえた女が、中央にあるソファーに向かいあわせ  
で座っていた。

僕らが入ってきたことに気付くと、校長は立ち上がり、女はハンカ  
チを膝元に下ろした。

「待っていましたよ、富永君。」

「……………あの方は？」

僕は校長に、その女に目を向けつづやくように聞いた。  
校長は少し困ったように僕に言った。

「ああ……………ちよつと困った事になってね。あの方は君のクラスの金沢くんのお母様ですよ」

「そうですか……………」

僕はとりあえず金沢母に軽くお辞儀をし、教頭らが座っているソファアの隣に立った。

「で？どうして僕らはここに呼ばれたんでしょうか」

僕は校長がソファアに座ると同時にそう聞いた。  
校長は重い口を開くように静かに話し始めた。

「……………実は金沢馨くんが、先週金曜日の夜コンビニに出かけたきり、もう2日も家に帰ってないそうなんだ。」

「……………はあ……………家出かなんかじゃ……………」

「……………それが……………」

僕の隣で立っていた土井が突然口を挟んだ。

「それが、少し調べてみたんですが……………近隣の高校でも似たような事が起こってるらしく……………」

「…似たようなこと…?」

「はい。夜、家を出た子がそのまま帰ってこないんです」

「……高校生?」

「ええ。」

土井は静かに頷いた。

「…で、どうして僕がここに呼ばれたんですか?」

数分前に校長に聞いた事を、僕はもう一度言った。

「あなたが、…以前勤務していた学校である事件を解いたと、聞いたことがあったからです…」

答えたのは、土井だった。

「……ほお。あれ、ですか。」

僕は校長に目を向ける。

「確か、あの事件は校外にはばれないように、と関係者以外には何も話さなかったのですが…」

校長先生は知っていらしたんですね。……それも、…こんな数学教師にまで…」

『あの事件』。

このことはまた後で話すでしょう。  
今は色々と面倒だしね。

少しだけ、この話に出てくるけれど。

「で、この僕に解いて欲しい、と。まだ事件だとも決まっていないのに？」

「……だったら……だったら譬はっ、理由もなく家を出て、理由もなく帰って来ないって言うんですか?!」

突然ソファーから立ち上がり、手に持っていたハンカチを握り締め、金沢母が叫んだ。

さっきは気付かなかったが、身長は僕よりも高く、土井より低い。スレンダーな体型の、俗に言う、『モデル体型』というヤツだな。

僕は隣に立っている土井を見上げ、小さくため息をついた。

「……………やればいいんでしょう、やれば。」

土井は小さくガッツポーズをしていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0601d/>

---

ホームズノート

2010年10月9日02時22分発行